

# スコットランド演劇 2010

## クリエイティブ・スコットランド、そして躍りでる人材

2010年5月の総選挙は、保守党と自民党の連立内閣を誕生させた。トニー・ブレア率いた1997年の「新労働党」の圧勝に始まる一つの時代が終わりを告げた。新しい時代は、例外なき財政削減とともに幕を開け、いま国民は公務員の大幅削減、大学授業料の最大3倍増という未曾有の事態に直面している。舞台芸術も例外ではなく、イングランド芸術評議会は芸術団体への助成の大幅な削減を余儀なくされ、芸術団体の混迷が続いている。

ところが、スコットランドについては少し様相が異なる。財政困難には違いはないのだが、労働党時代のスコットランドの半独立がもたらした「気風」が、この危機のなか、少しばかり遊離した活気を維持しているように見える。

### 「クリエイティブ・スコットランド」の誕生

2010年最大のニュースは、「クリエイティブ・スコットランド」の誕生である。スコットランドの芸術文化産業を振興・支援する一つの非政府公共機関として、スコットランド芸術評議会とスコットランド映画協会の統廃合の末、2010年7月1日に船出した。スコットランドの芸術文化産業—クリエイティブ産業—を高め、広げ、深め、世界に発信するという国家としての野心的な文化政策の意思の現れである。

具体的な変化としては、5つのナショナル・カンパニーへの財政支援が、これまでの芸術評議会経由ではなく、政府直轄となった。演劇分野では、2006年設立の「スコットランド国立劇場」がそれに当たる。金・人材といった資源の一極集中が懸念されてきたなかで、また、国内の既存の劇場・劇団との共同製作という当初の紳士的理念がしばしば反故にされはじめるなかで、政府直轄がどう影響を及ぼす

のかが気になるところである。

助成システムにおいても大きな変化がある。これまで芸術形態別、目的別の助成・評価が行われてきたが、これが一本化された。芸術形態に特有の諸課題を認知・配慮した助成から、芸術分野の特性を超えた「価値」への助成へと転換がはかられた。これが意味するものも興味深い。

新組織を率いるチーフ・エグゼクティブは、劇団の青少年プロジェクトの担当者からキャリアをスタートさせ、自治体の芸術担当、イングランド芸術評議会傘下の地域芸術評議会ノーザン・アーツでチーフ・エグゼクティブを務め、またニューカッスルの大規模再開発プロジェクトを担った人材である。芸術を理解するだけでなく、国家としての文化政策、産業政策を理解し、自治体との調整機能を持ち、様々な団体とパートナーシップを組み、芸術活動を振興しうる人材という意味ではわかりやすいのだが、面白いことに、スコットランド人でもなければ、スコットランドで仕事をしたこともない。過去のしがらみのないところという思惑も見える。そのアンドリュー・ディクソンは、(英国の)新連立政権の進める大幅な財政削減に対して距離を置き、目下のところ、芸術団体への助成削減は行わないと言明している。一つには、二つの助成機関の統廃合により数年前から経費削減が現在進行中であるから—例えば、経理や総務セクションが二つある必要はないわけで、統合が完成すれば、さらなるリストラが控えている。助成削減は自らを削ぎ落としたその後でというわけである。

### ヨーロッパ文化首都から20年—グラスゴー

混迷するイングランドに比して、スコットランドの芸術創造環境が恵まれていると感じるのは、自治

体の文化政策への強い関与もあるからだ。

1980年代のグラスゴー。造船産業の衰退から、人口流失、貧困と暴力で街の荒廃が進んだ産業都市が再生に向けて動き出すきっかけとなったのが、1990年の「ヨーロッパ文化首都」—ヨーロッパ評議会主導の、1年間にわたる大規模国際芸術フェスティバルの開催である。アテネ、フィレンツェ、アムステルダム、ベルリン、パリに続くには違和感のある選定だったが、最も大きな成果を残した。参加したために破たんした芸術団体もあったが、このフェスティバルの成功が芸術文化的にエディンバラに劣っているというコンプレックスを拭い去り、むしろコンテンポラリーで、アヴァンギャルドなヨーロッパ的な芸術創造の場としての発展を促すことになった。

また、自治体の意識を変化させ、芸術文化への財政支援を増額した。かつて芸術団体への支援の内訳は、芸術評議会が20%、グラスゴー市が8%だったのがいまは逆転した。90年に8団体しかなかった劇団が、世代交替も経て、いまは60団体を数えるようになった。後手に回っていたインフラ整備も進んだ。ユニークな近代美術館の開館、ギャラリーや芸術団体のオフィスが数多く入るCCA(Centre for Contemporary Arts)改築、スコティッシュ・ユース・シアター専用施設建設(無償貸与に近い)、そして、今年、かつて魚市場であった巨大なスペースが再開発され、45の芸術家のためのスタジオ/オフィスを備えた「ブリガイト The Briggait」としてオープンした。

現在のグラスゴーの芸術的底力を見つけたのが、2010年11月の「IETM—国際舞台芸術ミーティング」の開催である。市内30か所で、様々なショーケース・イベントや会議が展開された。ユニークだったのは、数多くのサイト・スペシフィック(その場所ならではの)芸術イベントである。レネ・マッキントッシュの設計・デザインの「スコットランド街学校博物館」でのフィッシュ&ゲームの『アルマメーターAlma Mater』は、ミュージアム・シアターの新しい可能性を示した。観客はi-padに導かれて博物館を歩く。目の前の実際と、i-padの



なかの映像—俳優たちは映像の中にいる—の交錯するなか、観客は時空を飛ぶ。劇団ヴィジブル・フィクションの『デメテル号の呪い Curse of The Demeter』は、帆船の船中を二人の俳優とともに観客が動くプロムナード・シアターである。両者とも多くの観客を対象にできるものではない。一般を対象とした公演ではないにせよ、個としての観客へのアプローチが見えてくる。

#### 児童青少年演劇の演劇的想像力

コンテンポラリーであり、アヴァンギャルドを志向するなかにあっても、児童青少年演劇のステータスが高いのもスコットランド演劇の特徴といえるかもしれない。IETMの一環、かつ一般公演として上演されたのが、TAGシアター・カンパニー(シティズンズ・シアター付属児童青少年劇団)の『宮殿のモンスターThe Monster in the Hall』である。スコットランドを代表する劇作家ディヴィッド・グレイグの新作である。舞台には4本のスタンドマイクのみ、後は若干の小道具を駆使しつつ、4人の俳優が歌い踊りながら、バイク野郎のダメおやじのもとに16歳の娘を置いておけない市役所のソーシャル・ワーカーと、引き裂かれたくない父娘の「闘い」の物語が、乗りのいいインディーズの音楽とコンピューター・ゲーム仕掛けで展開されていく。低コストの教育目的の青少年演劇でありながら、大人も楽しめるものにした戯曲の仕掛けと演出ガイ・ホーランズの遊びの妙、俳優のうまさに打ちのめされた。このような演劇が学校を巡演しているのだ。ちなみに、父親とソーシャル・ワーカーを演じた二人の俳

優は、グレイグ作、ホーランズ演出の同劇団の3年前の秀作『黄色い月 Yellow Moon』にも出演していたベテランである。両作品のレパートリー上演が望まれてならない。

夏のエディンバラ国際&FRINGE・フェスティバルは広く知られるが、もう一つ大切な演劇祭として、「Imagine—エディンバラ国際児童青少年演劇フェスティバル」がある。毎年5月にエディンバラで開催され、一部の作品は地域をも巡演する。

2010年のImagineで話題を呼んだのは、幼くして被爆、12歳で命を落とした広島の実話をモチーフにして、演出家ルー・ケンプと劇作家アヴィゲイル・ドハティが作り上げた『千羽鶴 One Thousand Paper Cranes』である。シンプルながらも演劇的想像力を駆使することで、あえて歴史的事実や細部の再現を避けた。過度の感傷に陥りがちな難しいテーマを明るさをもって問いかけた点が高く評価された。



### 劇作家を育てる環境

劇作家を育てるインフラ整備も進む。もとより北のロイヤルコートとも目されるエディンバラのトラバース・シアターは新作上演の家であり、新作上演にこだわり、人材育成に尽力してきた。さらに、劇作家育成を目的に2004年に設立された「プレイライツ・スチューディオ・スコットランド」がセクター全体をまきこみながら、野心的な活動を展開し続けている。環境の整備は、著名になっても故郷にこだわり、スコットランドに在住する劇作家を増やすことにつながっている。

昨年、グラスゴウのトロン・シアターが新たに「オープン・ステージ賞」に着手した。その最初の受賞作品の一つ『海と大地と空 Sea and Land and Sky』が、2010年10月、同劇場で上演された。第一次世界大戦下の1916年、スコットランド婦人病院からロシア戦線に派遣された従軍看護婦らが残した日記をベースに、戦争に直面した若い娘たちの様々な思いが、演劇的想像力を駆使して、詩的に残酷に描かれた。先に紹介した『千羽鶴』のアヴィゲイル・ドハティの作品である。

イングランドでのスコットランド演劇の受容はいまだ一言葉の壁もあって十分であるとはいえないが、ディヴィッド・グレイグ、ディヴィッド・ハロワー、ダグラス・マックスウェル、ツイニー・ハリス、ロナ・マンローといった英国演劇の第一線で活躍するスコットランド人劇作家に加えて、新たな人材が輩出されることで変化していくのだろう。ただ「偏見」を払拭するにはどうしても時間がかかる。

### ボーダーを越えて

もちろん、ご当地物にこだわってばかりではない。2010年に高い評価を得たのは、トラバース・シアターのエドワード・オルビー作『山羊、もしくはシルヴィアって誰?』であり、ダンディ・レップ・シアターのソンドハイム・ミュージカルの傑作『スウィーニー・トッド』である。新作の家トラバースが、同作を上演することには反論もあったようだが、芸術監督で演出に携わったドミニク・ヒルは「スコットランド初演も新作のカテゴリーに入っている」と言明する。筆者はジョナサン・プライス主演による2004年のアルメイダ・シアターでの英国初演も観ているが、トラバース版に軍配を上げたい。焦点が夫からより妻に置かれたのは、女優シアン・トーマスの存在感ゆえだろうが、そのためによりこの作品の不条理性と面白みがクローズアップされた。シーズン年度で語るなら、2009年10月初演のウルスラ・ラミ・サルマ作、ヒル演出『闇 The Dark Things』は忘れてはならない秀作である。



上 「山羊、もしくはシルヴィアって誰？」

下 「スウィーニー・トッド」

『スウィーニー・トッド』（ジェームス・ブライニング演出）のダンディ・レップは、英国で唯一劇団制を維持する地域劇場だが、劇団員に歌専門がないにもかかわらず、個性豊かな俳優のアンサンブル、日頃からのトレーニング、そして適切かつ刺激的なゲスト俳優の参加により、質の高いミュージカルを生みだした。ロヴェット夫人の劇団員アン・マリー・ロスの怪演は圧巻である。2007年度に続いて、2010年度のTMA（中劇場協議会）最優秀ミュージカル賞を獲得し、スコットランドの地方都市にロンドンの演劇関係者の目を惹きつけた。また、ダンディ・レップの作品でしばしば高く評価されるのがダイナミックな美術である。フリーのデザイナーたちだが、古く恵まれていない設備を変化させる「魔法」を見るようである。さらに、2009年、アソシエイト・ディレクターとしてダンディ・レップのチームに加わった女性演出家ジャミマ・レヴィックは、『エレファント・マン』『エクウス』の演出でいきなり演劇界の注目を集めた、いま最もヴィヴィットなスコットランドの若き才能である。

中山夏織 / Kaori Nakayama

社団法人国際演劇協会  
Theatre Year-Book 2011: Theatre Abroad  
「諸外国の演劇事情」所収